

東日本大震災における中・高校生の気がかりなこと 及び学校で身につけておく力

入江 和夫・末重 桃子^{*1}・鮎川 友子^{*2}・中川 育子^{*3}・山野 京子^{*4}・入江 正己^{*5}

Secondary School Students' Worries about "the Great East Japan Earthquake"
and How Schools Can Help Them Prepared for Such a Disaster

IRIE Kazuo, SUESHIGE Momoko^{*1}, AYUKAWA Tomoko^{*2}, NAKAGAWA Ikuko^{*3},
YAMANO Kyouko^{*4}, IRIE Masaki^{*5}

(Received January 7, 2014)

キーワード：中学生、高校生、気がかり、防災教育、家庭科

はじめに

東日本大震災及び原発事故発生から約2年9ヶ月が経過しようとしている。自治体や国からは防災に関する情報が数多く出されている。横浜市(2013)の「津波からの避難に関するガイドライン」では、市にとって浸水面積及び浸水深が最大となる「慶長型地震」による津波をモデルとした津波避難の具体的なノウハウが示されている。総社市の「災害時に備えて準備しておくもの」では、避難するとき、最初に持ち出すべき非常持出品及び被災後の生活のために準備しておきたい災害用備蓄品がリストされている。また、新潟県(2012)の「サバイバル料理集」では救助が受けられるまでの間、健康を守るために備えておきたい食品、調理器具、衛生用品や衣類などの他、「ポリ袋で作る野菜スープ」などの料理レシピが紹介されている。気象庁(2013)の「津波に備える」ビデオでは発生メカニズム、速さなどの特徴及び危険のある地域を示す国際標準化マークなどが解説されている。内閣府(2011)の「特集東日本大震災から学ぶ」では、釜石東中学校による貴重な体験談が紹介されている。このように自治体や国による災害への備えは急速に進んでいる。

文部科学省(2008)「「生きる力」を育む防災教育の展開」の中で「発達の段階に応じた防災教育」の目標が示されている。それは中学校段階で「日常の備えや的確な判断のもと主体的に行動するとともに、地域の防災活動や災害時の助け合いの大切さを理解し、すすんで活動できる生徒」、高校で「安全で安心な社会づくりへの参画を意識し、地域の防災活動や災害時の支援活動において、適切な役割を自ら判断し行動できる生徒」の育成である。また、この中の防災教育と関連づけられた教科をみると「家庭科」などが含まれていることから、今後、家庭科がどのように防災教育に対応できるのかが問われているのではないかと考えられる。

入江(2013)らは中高校生による「東日本大震災及び原発事故で気がかりなこと」の自由記述をカテゴリ化した項目に関して教育学部大学生を対象に、影響要因を分析したところ、「家族の防災対応」「避難生活の備え」は「家族の団結力」など家庭科の内容に関わりがあることを明らかにした。今回は、その中高生生の「気がかりなこと」と同時に調査した「学校で身につけておくべき力」の自由記述を整理して示すとともに、これらと家庭科の内容を関連づけて一考したので述べていく。

1. 方法

1-1 調査内容：「2011年3月に東日本大震災及び原発事故が発生し、1年以上が経ちました。今後、同

*1 末重製茶 *2 山口県立光市立光井中学校 *3 山口県立周防大島高等学校 *4 山口県立青嶺高等学校 *5 わせがく高等学校

様のことが自分や身の回りに起こった際に気がかりなことを2つあげてください。そしてそれを解決するためには学校の中でどのような力をつけておくべきでしょうか」（自由記述式）

1-1-1 時期：平成24年6～7月

1-1-2 対象：中学生 228名 総件数456、空白を省いた有効件数378件

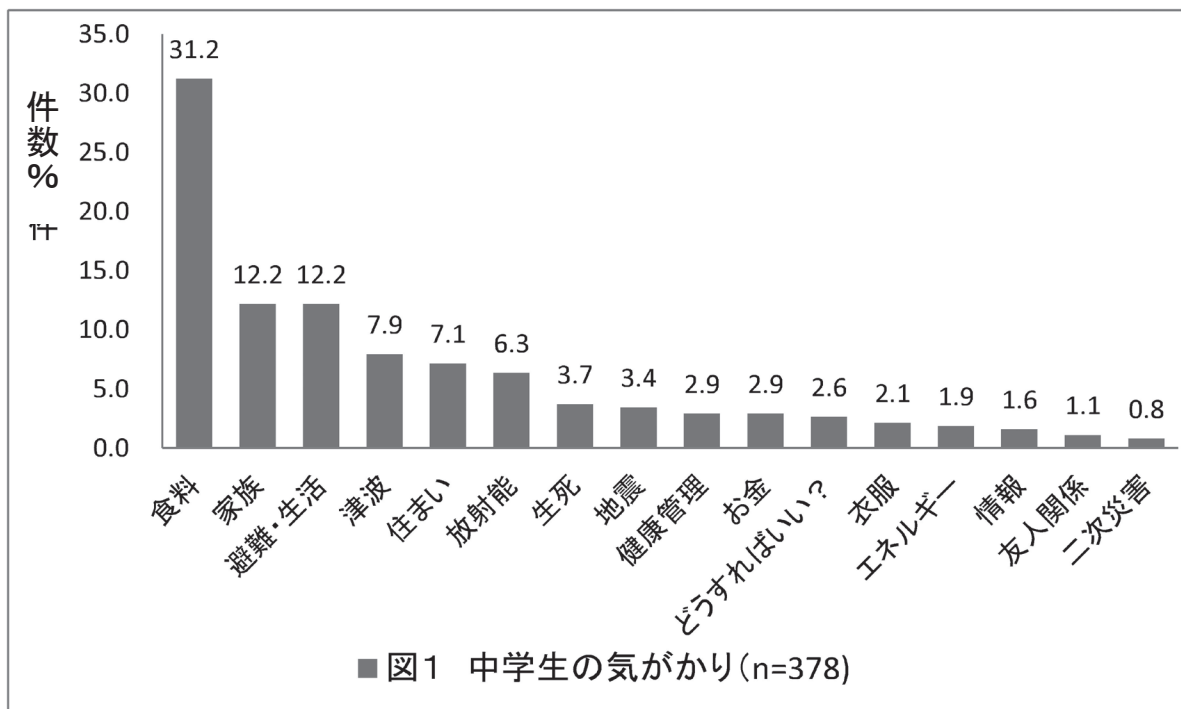
山口県立高校、市立中学校、千葉県私立高校の生徒199名 総件数398、
空白を省いた有効件数354件

2. 結果と考察

2-1 中学生

2-1-1 「気がかり」なこと

中学生の「東日本大震災及び原発事故で気がかりなこと」について、カテゴリ別の件数%を図1に示した。



第1位の項目は「食料」31.2%であった。第二位は「家族」や「避難・生活」12.2%であり、食料に比べ、約1/3程度であった。第4位「津波」7.9%、第5位「住まい」7.1%、第6位「放射能」6.3%、第7位「生死」3.7%、第8位「地震」3.4%、第9位「健康管理」「お金」2.9%、第11位「どうすればいい?」2.6%、第12位「衣服」2.1%、第13位「エネルギー」1.9%、第14位「情報」1.6%、第15位「友人関係」1.1%、第16位「二次災害」0.8%となっていた。上位の特徴は「家族」が含まれていることであり、中学生は身近な心配ごとに関心が高いのではないかと考えられる。

2-1-2 「学校で身につけておくべき力」

1位～第6位の「気がかり」に関する「学校で身につけておくべき力」を表1にまとめた。ここでは第3位までの「学校で身につけておくべき力」の内容を防災教育及び家庭科教育に関連づけて一考していく。

表1 中学生における震災の気がかりに関して「学校で身につけておくべき力」

| カテゴリ | 気がかり | 学校で身につけておくべき力 |
|---|---|--|
| 食料 | 1 食べ物が少なくなる | 長く置いておいて良いものや少量しか食べなくても、エネルギーに代わるものなどの知識を知っておく |
| | 2 栄養失調になるのでは | 少ない量で栄養が十分にとれる食べ物を知る |
| | 3 食べるものがなくなる | 自分で調理ができるようになっておく |
| | 4 食べ物や水が十分にあるか | 少しの食べ物や水でも、栄養がある料理を作れるようにする。草など自分で食べられるものか、食べられないものか、判断できるようにする |
| | 5 衣食住の生活 | 食べ物がなくなるので調理ができるようにしておく |
| | 6 水がない | 水を自分でためる。雨をためる。海水を真水にする。人にもらいに行く。 |
| | 7 食べ物が無い | どんな非常食を持っていくか考える。袋に入れておく |
| | 8 水がない | 備蓄しておく |
| | 9 食べ物が足りなくなる不安 | すぐに食べ物を持ち運べるようにしたら良いと思う。非常事態にすぐ対応できるようにする。 |
| | 10 食事のこと | 携帯食料などを所持しておく（3日分くらい） |
| 家族 | 1 親と離れ離れになった | 一人でも考えて動く、行動力。どこに逃げたらいいか知っておく、知識力。 |
| | 2 家族がバラバラになる | 避難にはどのような備えが必要か。人に尋ねる力。コミュニケーションの力。 |
| | 3 家族とバラバラになったときのこと | 連絡を取れるものを日頃から持っておく |
| | 4 家族がバラバラになる | 連絡方法を知っておく |
| | 5 家族がみんな逃げてくれているかどうか | 家族が逃げていると信じる |
| | 6 家族みんな助かるのか | 素早い行動と判断力。みんなへの思いやり。 |
| | 7 家族の身の安全が確認できない | まわりの人に聞くコミュニケーション能力、まわりの人に自分の安否を知ってもらう力（メモなど） |
| | 8 家族の身のまわりの安全 | 電話で聞く。まわりの人に聞く（コミュニケーション能力）。まわりの人に自分は安全だと伝える。 |
| 避難・生活 | 1 どこに避難すれば良いか | どこへ避難すればよいかを知らせたり調べたりする |
| | 2 津波 家が壊される どこに避難したらいいの | どこに避難したらいいのかわかること |
| | 3 どこに逃げたら安全なのか | あらかじめ安全な場所を知っておく |
| | 4 パニックになること | 落ち着いて行動する |
| | 5 避難できる所があるか | 避難の仕方 |
| | 6 早く避難することはできなかったのか | 地震大国と分かっているながら訓練が少ないので1カ月に1回くらいはする |
| | 7 避難する場所はどこなのか | 日頃から話をし、学校にいる時に被災した時に備えておくべきだと思います。そのために、避難訓練をもっと頑張っていけばいいと思う。 |
| | 8 避難生活をするとき衣・食・住ができるのか | 最小限でできる生活の仕方 |
| | 9 全く知らない人と一緒にいないといけ | いろんな人と付き合える力をつけておく |
| | 10 知らない人と共に生活をしないといけ | 体育や総合でいろんな人とコミュニケーションの力をつけておく！ |
| 津波 | 1 多くの人が津波で亡くなったこと | 防災意識を普段から身につける。避難訓練を学校などで行って、いざという時に逃げるようにする。避難場所などを家族とよく話し合い、いざという時に行けるようにする。 |
| | 2 津波 | 地震から津波発生までの過程。津波の性質や動き。震度に対しての高さなど。 |
| | 3 津波が来た時の準備をしておく | 頭の力。津波が来る前に逃げる準備をしておく。 |
| | 4 安全な所に逃げる | 日ごろの避難訓練や災害についての講演会を真剣に行うこと。 |
| | 6 地震で津波が来た時にどこに避難したらいいか | どこが避難場所なのか確認しておく。行くまでの道のりを確認、実際に行ってみる（訓練）。 |
| | 7 津波がくる | 集団行動の強化。避難場所をあらかじめ決めておく。 |
| | 8 津波で遅れたらどこに避難すればいいか | これは学校で消防署の人に聞いて学校では授業をしたらいいと思う |
| | 1 住みやすいか | 寝る時、一番疲れがとれる方法 |
| 2 住む所がなくなる | いろいろな情報を聞く力と協力することを身につけておく | |
| 3 住む所がなくなる | 知っている人などの家を借りる（コミュニケーション能力）。学校に行く。仮設住宅など。 | |
| 4 建物の耐震性 | 建物を補強しておく | |
| 5 家が無くなったらどうなるのか | 生きていくためのことを学ぶ | |
| 6 津波によって、家が流されたために、仮の住居で住むとき、どうすればいいのだろうか。冷静でいられるのだろうか。 | 仮の住居での過ごし方 | |
| 7 住居を探すこと | 自分の力で住居を探さないといけ。コミュニケーション能力をつける。判断力をつける。 | |
| 8 住む所がない | 家がなくても生活できる、みんな協力する | |
| 9 家が流されたらどうするか | 仮設住宅を探す情報収集能力 | |
| 放射能 | 1 原発 | 放射能について調べておく |
| | 2 放射能で汚染された野菜（ビニールシートで育てない野菜） | なるべく最低限でも買物する時にどこで取れたのかを確認して買う |
| | 3 放射能 | なるべくならその土地にいない。建物でガードする。 |
| | 4 原発事故が起きたらどうするべきか | 避難場所を調査する |
| | 5 原発について | 原発について、よく知っておくこと。仕組みについて知っておく。 |
| | 6 原発の爆発 | 逃げる力 |
| | 7 放射能を浴びないためには | 場所を教える |
| | 8 放射線はどこまで怖いものか | もっと詳しく教えてほしい |
| | 9 放射能による影響について | 学校で、放射能についての怖さとか、浴びた時の影響についての学習の機会をもっと増やしてみんなが理解しておくべき |

2-1-2-1 「食料」

中学生が考える「気がかり」の「1 食べ物が少なくなる」～「6 水がない」に関する「学校で身につけておくべき力」は「長く置いておいて良いものや少量しか食べなくても、エネルギーに代わるものなどの知識を知っておく」「少ない量で栄養が十分にとれる食べ物を知る」である。これらは食品保存や栄養摂取などに関することであり、現在の家庭科の内容である。しかし、家庭科には防災時に役立つ観点からの記述はなく、このことを書き加えることで生徒の「学校で身につけておくべき力」に応えることができる。また、「自分で調理ができるようになっておく」などがある。調理実習は生徒の生活自立の観点から行われているが、災害と絡めることで、調理実習の新たな意味づけが加わり、その重要性を意識できるのではないかと考えられる。

新潟県(2012)「～災害時を知恵と工夫で乗り切る!～ サバイバル料理集」では、「災害時は、いつもと違う環境やストレスなどで体調を崩しやすくなる」とあり、限られた環境の中でも、日ごろの食事に近づける工夫が重要であることが記載されている。気がかり「6水がない」に対して「水を自分でためる。雨をためる。海水を真水にする。人にもらいに行く」がある。雨水を「水を自分でためる」ことは雑菌混入が考えられ、また飲料水は厳しい衛生基準があることから、難しい。飲料水等の衛生と確保の観点から理解させたい。

気がかり「7食べ物がない」～「10食事のこと」に関して、「身につけておくべき力」は「どんな非常食を持っていくか考える。袋に入れておく」「備蓄しておく」「すぐに食べ物を持ち運べるようにしたら良いと思う。非常事態にすぐ対応できるようにする。」「携帯食料などを所持しておく(3日分くらい)」と考えている。後者に関して、総社市の「大規模災害の発生直後は、救援物資が届くまでには3日かかるといわれています。災害時に備えて準備しておくものは、家族構成を考えて必要数を用意し、非常持出品はリュックサックなどに入れて、避難時にすぐ取り出せる場所に保管」とあり、中学生が考えている内容は適切である。家庭科から考えれば、学習指導要領「B食生活と自律」の「(2)ウ 食品の品質を見分け、用途に応じて選択できること」の中の「食品の保存方法」で、災害の備蓄を学習内容に追加することや、新潟県(2012)に記載されている非常持出品のチェックリストを活用することで、対応できる。

2-1-2-2 「家族」

気がかり「1親と離れ離れになった」～「6家族みんな助かるのか」に関して、「学校で身につけておくべき力」として「一人でも考えて動く、行動力。どこに逃げたらいいか知っておく、知識力。」がある。これは「てんでんこ」であり、それは「てんでばらばらに」の方言で、津波の時は 家族さえ構わずに、1人でも高台に走って逃げろという意味(デジタル大辞典)である。東日本大震災の後、「津波てんでんこ」は津波避難の大原則として広く認知されている。このことも避難訓練に入れるべきであろう。京大の矢守克也によれば、「津波てんでんこ」は4つの意味があり、それらは1自助の原則、2他者避難の促進、3相互信頼の事前醸成、4生存者の罪悪感の低減である(河北新報 2013)。このような意味を家族で話し合い、相互理解することが重要であり、「A家族・家庭と子どもの成長」の「(2)イ これからの自分と家族とのかかわりに関心を持ち、家族関係をよりよくする方法を考えること」で対応が可能である。

気がかり「7家族の身の安全が確認できない」「8家族の身のまわりの安全」では「まわりの人に聞く力→コミュニケーション能力、まわりの人に自分の安否を知ってもらう力(メモなど)」「電話で聞く。まわりの人に聞く(コミュニケーション能力)。まわりの人に自分は安全だと伝える。」を「身につけておく力」と考えている。普段、話したことが少ない人に自分から話しかけるコミュニケーショントレーニングが重要である。前述と同様に家庭科内容Aの「(2)ア 家庭生活と地域との関わりについて」の中で、災害には地域の協力が欠かせないこと、コミュニケーションが必要なことを加えることで、対応できる。

2-1-2-3 「避難・生活」

気がかり「1どこに避難すればいいか」～「5避難できる所があるか」に対して、学校で「身につけておくべき力」は「どこへ避難すればよいかを知らせたり調べたりする」「どこに避難したらいいのかわかること」「あらかじめ安全な場所を知っておく」「落ち着いて行動する」「避難のしかた」である。避難について、大地震が発生したとき、まず避難ありきではない。多摩市(2013)「多摩市防災マップ」における基本的な避難方法では、発生直後で「落ち着いて自分の安全を守る」「余裕があれば火の始末」「状況の確認」→「火災などの危機がない」「自宅に被害なく安全」であれば、自宅待機である。一方「火災が接近する危険がある」「自宅が損壊し、家では不安」であれば、公園広場などの一時避難場所へ避難、広域避難場所に避難である。防災マップを活用し、家庭科内容「C 衣生活・住生活と自立」の「(2)イ 家族の安全を考えた室内環境の整え方…」ここを拡張して学習できる。

気がかり「6早く避難することはできなかったのか」「7避難する場所はどこなのか?」に関して、「地震大国と分かっているながら訓練が少ないので1カ月に1回くらいはする」「日頃から話をして、学校にいる時に被災した時に備えておくべきだと思います。そのために、避難訓練をもっと頑張っていけばいいと思う。」が「身につけておくべき力」である。東日本大震災で大津波が押し寄せ、一人の犠牲者も出さず、「釜石の奇跡」とたたえられている釜石東中学校では年70時間の総合学習の3分の1を費やして、避難訓練だけ

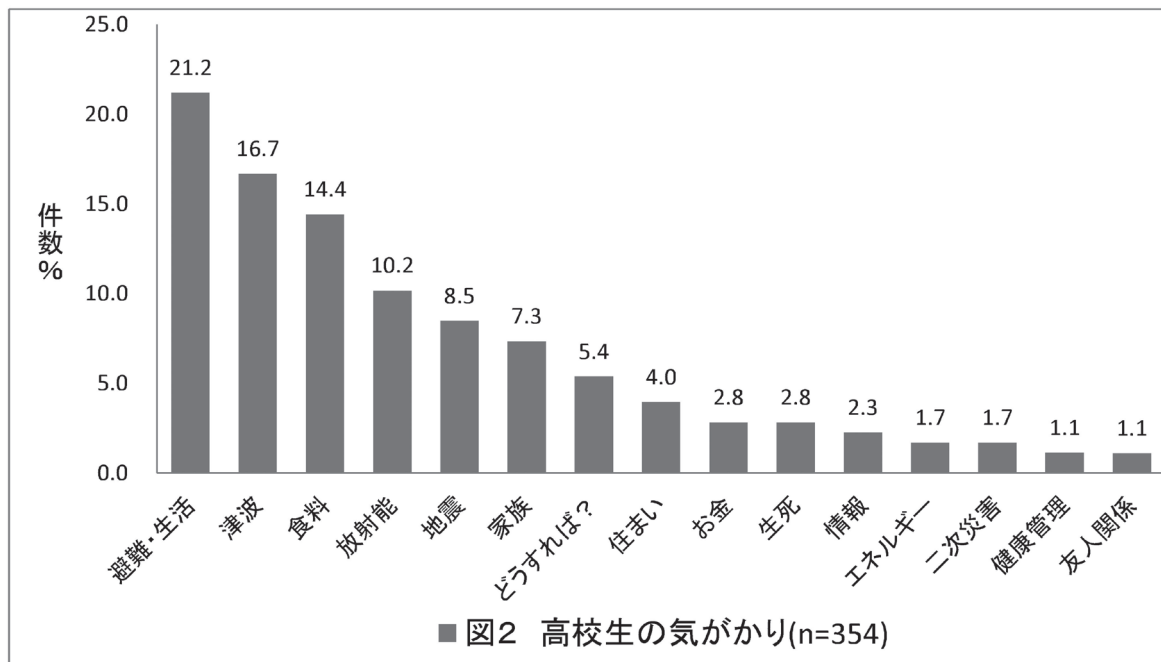
でなく、通学路の防災マップを作製するなど防災教育に取り組んできたことが報道されている（中日新聞2012）ことから、家庭科と総合的な学習をリンクさせた防災教育も考えられる。

気がかり「8 避難生活をするとき衣・食・住ができるのか」「9 全く知らない人と一緒にいないといけない」「10 知らない人と共に生活をしないといけない」では「最小限でできる生活の仕方」「いろいろな人と付き合える力をつけておく」「体育や総合でいろいろな人とコミュニケーションの力をつけておく！」が「身につけておくべき力」である。避難生活では交流の少ない人との協力が必要と考えられることから、このことを想定したコミュニケーション活動が重要であり、これも家庭科内容Aで対応が可能である。

2-2 高校生

2-2-1 「気がかり」なこと

高校生の「東日本大震災及び原発事故で気がかりなこと」について、カテゴリ別の件数%を図2に示した。



第1位の項目は「避難・生活」21.2%についてであった。第2位では「津波」17.7%、第3位「食料」14.4%、第4位は「放射能」10.2%、第5位は「地震」8.5%、第6位「家族」7.3%、第7位「どうすれば」5.4%、第8位「住まい」4.0%、第9位は「お金」2.8%、第10位「生死」2.8%、第11位「情報」2.3%、第12位「エネルギー」1.7%、「二次災害」1.7%、第14位「健康管理」1.1%、第15位「友人関係」1.1%となっていた。

第1位から第3位を見ると、その特徴は中学生にあった「家族」が後退し、代わりに「津波」が入ったことである。

2-2-2 「学校で身につけたい力」

図2の順位1位～第6位の「気がかり内容」に関する「学校で身につけておくべき力」を表2にまとめた。ここでは第3位までの「身につけておくべき力」の内容を防災教育及び家庭科教育に関連づけて一考した。

表2 高校生における震災の気がかりに関して「学校で身につけておくべき力」

| カテゴリ | 気がかり | 学校で身につけておくべき力 |
|-----------------------|--------------------------------|--|
| 避難・生活 | 1 どこに逃げるか | 避難訓練をしっかりとる |
| | 2 みんな無事に逃げれるか | 避難の仕方 |
| | 3 安全な避難場所 | 避難経路の確認 |
| | 4 何を持って行けばいいの | 身の回りに震災が起きても大丈夫なように身につけておく（携帯、お茶など） |
| | 6 避難の仕方 | いろいろな災害に対応できるように避難の仕方を学びたい、落ち着いて行動できるようにしたい |
| | 7 周りの人たちは避難場所が分かっているのか（特にお年寄り） | 普段から皆と場所の確認をしておく |
| | 8 避難する際に最も大切なこと気をつけないといけないこと | 洪水のときにはどのような場所に、地震が起きたときにはどのような場所に避難したらよいかなど災害の種類によっての避難場所を知っておきたい |
| | 9 仮設住宅でノイローゼにならないかが心配 | 心も成長していかないとダメだと思う |
| | 10 避難所で知らない人と過ごせるか | コミュニケーションの力 |
| | 津波 | 1 家が海の前で津波がきたら確実に孤立してしまう |
| 2 また同じような津波が起きたらどうするか | | 地震と津波が同時に起きたら逃げる場所やここに来たら大丈夫な所をきちんと決めて覚えておく |
| 3 すぐに逃げるができるか（津波） | | 避難訓練をちゃんとする |
| 5 津波 | | どこにいたら安全かを調べておく、最短ルートを探しておく |
| 6 海の近くなので津波 | | 学校では身に付けられないけど近くは少し高い山などがあるので大きな地震が起きると少しでも遠くに逃げるようにしたい、津波が小さくても |
| 7 津波 | | 津波に対応する設備 |
| 8 津波で流された人や家 | | 津波に耐える学校 |
| 食料 | | 1 食料不足 |
| | 2 非常食 | 非常食の準備 |
| | 3 食料（水） | 備蓄しておく（食料を） |
| | 4 食料の不足 | 保存食について教えてほしい |
| | 5 生活が困難になる（食料不足など） | 実際に起こったときどのように対応すればよいか、少しの材料でできるたくさんの料理の種類、簡単にできる料理、非常食をどれくらい用意したらいいか、どのような非常食を用意したらいいか |
| | 6 水や食料が足りなくなること | 生きるために必要なエネルギーを学ぶ、足りない食料や水を譲り合ったりする協力する力 |
| | 7 食料 | 食べられる野草と食べられない野草を見分ける力 |
| | 8 水が出なくなったら、電気が使えなくなったら | 水が出なくなったらどうしたらいいか、電気が使えないときどうしたらいいか、水・電気が使えなくなったら食べるものも限られるからどうしたらいいか |
| | 9 食料確保や家族との連絡 | 授業などで食べられる物と食べられない物が分かるような力をつける、植物の育て方、緊急時はとっさに大切なもの（携帯など連絡できるもの）をもって学校から出る力 |
| | 10 食料について | 食べれる野草を知る、絶対に食べてはいけない野草を知る |
| 放射能 | 1 地震があったときの爆発 | 最低限の避難訓練 |
| | 2 放射線による被害 | 理科で放射線について学ぶ |
| | 3 放射線による被害または放射能 | 放射線による被害を受けないための対策授業、受けたときも |
| | 4 放射線による食べ物の影響 | 放射線の影響や性質のことを知り授業でも詳しく教えてもらいたいです |
| | 5 放射線 | 放射線のために避難方法を考えておきスムーズにできるようにしておく |
| | 6 放射能 | 素早い避難、マスクをつける |
| | 7 放射能が1年以上たってもなくなるのにはなぜか | 土を新しいのに換えたりしているが放射能を殺せるような薬などはないのだろうか、東北の人たちは魚や海藻が放射能で食べられないので放射能にかかっている地域が東北に魚を送ってあげたらいいと思う |
| | 8 放射線 | 放射線を浴びた時に人間にとってどのような害があるのか、どのように防いだらいいかを勉強しておく |
| | 9 原発の事故による避難区域や被爆のこと | 原発についての勉強、事故が起きたときにどんな被害が起きたりするののかの勉強 |
| | 10 放射線が含まれた水が流れたこと | 海に流れてしまうと日本全体が不安になってしまうので防ぐ方法などや、どうやって流れたかなど詳しく知りたい |
| 地震 | 1 校舎が崩れる | 建て替え工事をする |
| | 2 地震 | 大切なものをある程度まとめておく |
| | 3 地震 | 自分や身の回りの人達を守ることを身につけておく |
| | 4 家が地震に対応してないこと | 小さな地震でも食器やいろいろなものが落ちてくるので地震がくる前に対応する |
| | 5 地震が起きた時どこに隠れるか | 学校で訓練しておく |
| 家族 | 1 家族の安否 | きちんと連絡が取れるようにきちんと携帯などを持っておく |
| | 2 家族との集合場所 | 場所をきちんと確認しておくこと |
| | 3 家族は大丈夫か | 連絡が取れるようにしておく |
| | 4 家族や友達が無事確認 | どういう風に連絡を取ったらいいか、どういう風に無事を確認できるか、もし1人だった場合どう行動とったらいいか |
| | 5 家族と連絡が取れない | どこかの連絡ができる所を探す、家族の人が連絡できる物を持ってなかったら緊急の時に集まる場所を決めておく |
| | 6 周りの人たち（家族）の安否 | 非常時でも冷静に物事を考え行動する力、いろいろな方法で情報を集める力 |
| | 7 何よりも家族の命があるかどうか | パニックにならず冷静に対処できる力、すぐに家族や親せきに連絡が取れるようにする |

2-2-2-1 「避難・生活」

気がかり「1 どこに逃げるか」～「10 避難所で知らない人と過ごせるか」に関して、「学校で見つけておくべき力」は、ほぼ中学生と同様の内容であった。気がかり「7 避難する際に最も大切なこと気をつけない」

いこと」に注目する。「洪水のときにはどのような場所に、地震が起きたときにはどのような場所に避難したらよいかなど災害の種類によつての避難場所を知っておきたい」としている。内閣府（2011）の中央防災会議「災害時の避難に関する専門調査会」第5回資料によれば、「災害の種類毎に避難所を指定している自治体は少数（25%）」である。三重県尾鷲市の市民文化会館は土砂災害の避難場所であるが、津波の避難場所ではないことが示されている。こうしたことから、地域ごとに災害の種類と避難所を把握しておくことが重要である。「中学生」で述べたように「避難・生活」は家庭科で対応できる。

2-2-2-2 「津波」

気がかり「1家が海の前で津波がきたら確実に孤立してしまう」～「8津波で流された人や家」に関して、高校生は「情報をよく見ておき冷静に対応できるようにしておく、逃げ道を知っておく」「地震と津波が同時に起きたら逃げる場所やここに来たら大丈夫な所をきちんと決めて覚えておく」「避難訓練をちゃんとする」「どこにいたら安全かを調べておく、最短ルートを探しておく」「学校では身に付けられないけど近くは少し高い山などがあるので大きな地震が起きると少しでも遠くに逃げるようにしたい、津波が小さくても「津波に対応する設備」などを「身につけておくべき力」と考えている。これらを横浜市（2011）の「津波からの避難に関するガイドライン」から考察すると、適切な内容である。しかし、「少しでも遠くに逃げるようにしたい」の「遠いところ」ではなく、「高いところ」へ避難するようにガイドラインには書かれている。横浜市の場合、避難する場所の目安は海拔5m以上の高台か、鉄筋コンクリート造等で地震の揺れによる被害のない建物で、3階以上である。そこには「今自分がいる場所がどのくらいの高さであるかを知っておくこと。」「複数の避難場所の確認、移動には実際にどのくらい時間がかかるのか、あらかじめ調べておくこと」なども書かれている。ここでも「津波てんでんこ」の事例が紹介されている。特に、家族さえかまわず逃げるためには家族の話し合いで、お互いの十分な理解が必要であり、家族関係がある「家庭基礎」 「(1) ア 青年期の自立と家族・家庭」で対応可能である。

2-2-2-3 「食料」

高校生の気がかり「1食料の不足」～「5生活が困難になる（食料不足など）」に関しての「学校で身につけておくべき力」とは「自分でちゃんと料理を作れるようにできる力」「備蓄しておく（食料）」は中学生とほぼ同様の内容である。「5水や食料が足りなくなること」～「10食料について」に関しては「食べられる野草と食べられない野草を見分ける力」「水が出なくなったらどうしたらいいか、電気が使えないときどうしたらいいか、水・電気が使えなかったら食べるものも限られるからどうしたらいいか」がある。前者は避難時にはけが人も多く、万一、食中毒を引き起こす可能性があることから、今入手できる食材で、衛生的な調理のノウハウが重要である。後者も、電気が使えない、水が十分ではない状況を想定した調理実習が大切である。新潟県（2012）の「～ 災害時を知恵と工夫で乗り切る！ ～ サバイバル料理集」では、限られた道具で衛生的かつエコに作る調理方法、たとえば「ポリ袋で炊くご飯」などが紹介されている。家庭科でもこのようなことを組み入れることで、災害に対応できる役立つ教科になると考えられる。

おわりに

第1位から第3位の中学生の気がかり「食料」「家族」「避難・生活」、高校生「避難・生活」「津波」「食料」に関する「学校で身につけておくべき力」は従来の家庭科内容に防災教育の観点を絡めることで対応が可能である。また、そのようなことを実践することによって、生徒は、災害にも対応できる、応用範囲の広い、役立つ教科として、家庭科を理解するのではないかと考えられる。

今回の東日本大震災及び原発事故が生じたことにより、地震大国、日本は再び、同様の災害が生じることが予想される。自治体は人命を守る観点から防災に関する地域情報を数多く発信している。文科省も防災教育を学習指導要領や教科等の解説と関連付けを行っているように、防災教育の充実に向けて変化している。中学校技術・家庭科の家庭科分野の目標に、防災教育に関わる文言（下線部）を加えてみると「社会の変化や科学技術の進展に伴って、家庭生活も大きく変化しているが、これらの変化に主体的に対応し、よりよい生活を創造するためには、人間が生活するよりどころとなる家庭や家族の機能を理解するとともに、家族とのかかわりの中で、避難を考え、衣食住などの生活を災害が生じても対応できるように、生活を自立して営

む能力と態度を身に付けることが必要である。」のようになる。このような家庭科の充実に向けた教材開発を今後も続けていきたい。

参考文献

横浜市(2013)：津波からの避難に関するガイドライン

<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/kikikanri/keikaku/tsunami/tsunami.pdf>

新潟県(2012)：「平成24年度食生活改善推進委員協議会十日町支部 第1回研修会資料～ 災害時を知恵と工夫で乗り切る！ ～ サバイバル料理集」

気象庁(2013)：「津波に備える」

http://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/tsunami_dvd_sonaeru/index.html

内閣府(2011)：中央防災会議「災害時の避難に関する専門調査会」第5回資料

http://www.bousai.go.jp/kaigirep/chousakai/saigaijihinan/5/pdf/shiryoku_1.pdf

文部科学省(2008)：「「生きる力」を育む防災教育の展開」の第2章「学校における防災教育」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/.../1334780_04.pdf

入江和夫(2013)：「教育学部大学生の「防災の気がかり」と影響要因」山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要第36号 PP.1-8.

総社市HP：「災害時に備えて準備しておくもの」

http://www.city.soja.okayama.jp/kenko_anzen/syobo_bosai_anzen/bousai/mochidashi_bichiku.jsp

多摩市(2013)：防災マップ（災害時の避難場所及び避難所）

<http://www.city.tama.lg.jp/anshin/3919/1801/index.html>

河北新報(2013)：「第8部・教え（中）津波てんでんこ／避難と救助、消えぬ迷い」

http://www.kahoku.co.jp/spe/spe_sys1114/20130624_01.html

中日新聞(2012)：「釜石、生死分けた津波避難 明暗（上）」

<http://www.chunichi.co.jp/article/earthquake/sonae/20120312/CK2012031202000099.html>